

奉祝行事の見物者をめぐる定型表現と実践

——大正・昭和初期の都市世界の事例——

山口大学 右田裕規

1. 目的

20 世紀初期の日本社会にあって、天皇家の祝祭を視覚的な消費の対象として定位する経済運動は、都市と郡部のひとびとが地理的・文化的距離を超えて直接的かつ頻繁に交流する場を提供した。公的式典、奉祝行列、街路装飾など、自治体や企業家が街区にめぐらせた華美な景観を目当てに見物客が近隣郡部から流入し、「地方」と「中央」の居住者間の活発な交通が出現する。規模の違いを別にすれば、この種の事態は中小規模の都市を含めて全国的に見られたものである。

事態は一見、近代君主制儀礼に含められた政治的主題の達成、つまり君主をシンボルとした水平的で超地域的なネイション統合の実物的表れとして解釈できるように思われる。しかしながら、祝祭時の見物客にたいする都市居住者たちの想像力と取り扱いの相貌は、こうした解釈をしばしば否定するものだ。「田舎者」ないし「地方人」という表現を中核として編成されたその想像と実践の様式は、祝祭時の不均衡な交通・交換を媒介して、都市と郡部、「中央」と「地方」の社会的断絶が全国各所で深化していた可能性を示唆している。本報告の目的は、この可能性について検討を行うことで、奉祝行事を観光商品化する運動が含んだネイション分断作用を部分的に呈示することにある。

2. 方法

データとして用いるのは、20 世紀初期の全国紙・地方紙、経済実業雑誌、記念文集、警察の保安記録、職業紹介所の年次報告書などの記述である。一連の記述から都市のひとびとが祝祭時の流入者・観光者たちをどう表示・知覚し、またどう取り扱っていたのかについて分析を行う。

3. 結果

上述のデータからは次の 3 点が読みとられる。第 1 に、当時の日本社会では、奉祝行事・装飾の量的規模や見物客の多寡から、地域間の経済的・文化的格差を読みとる仕方が広く滲透していたこと。第 2 に、この解読様式の拡がりとも照応して、祝祭時の都市世界では、他地域からの流入者・見物者たちを劣位的属性の持ち主として表現する、つまり「同胞」ではなく「他者」として差異づける表現様式（「キナカノ人ガ、ハナデンシャヲミテ、ヒノカタマリガキタトイヒマシタ。ボクハオカシカッタデス。」というような表現形式）が中小都市を含めて定型化していたこと。第 3 に、天皇家の祝祭の前後において都市世界による地域世界の経済的収奪が平時以上に目立って繰り広げられていたことが（たとえば観光者たちを対象とした特別な価格設定・商法、諸々の奉祝行事に対する地域労働力の動員・使役、郡部への奉祝用商品の大量移出など）、この種の表現の流通と定型化を基礎づけていたと考えられることである。

4. 結論

以上から、本報告の知見は次のようにまとめられる。自治体や企業家、商店主たちによる奉祝行事の見世物化を媒介して、地域共同体の枠組みを超えた混淆的で国民的な交歓と同化の場が都市世界で現象する——この種の祝祭論的解釈が成立しがたいことを、奉祝行事の見物者をめぐって編成された表現と実践の体系は指し示している。それらはむしろ、奉祝行事の観光化運動の全国的滲透が、「中央／地方」「都市／郡部」という二分法に従いつつ「国土」を細分化し格差づける種類の社会的想像力の拡がりへと帰結した可能性を示唆している。